

「旧約の信仰者たちの手本」 預言者ゼカリヤ (11:35~39)

これ以上、何を言いましょうか。もし、ギデオンとバラク、サムソンとエフタ、また、ダビデとサムエルと預言者たちについても話すならば、時がたりないでしょう。彼らは、信仰によって、国々を征服し、正しいことを行い、約束のものを得、獅子の口をふさぎ、火の勢いを消し、剣の刃をのがれ、弱い者なのに強くされ、戦いの勇士となり、他国の陣営を陥れました。(11:32~34)

女たちは、死んだ者をよみがえらせていただきました。またほかの人たちは、さらにすぐれたよみがえりを得るために、釈放されることを願わないで拷問を受けました。また、ほかの人たちは、あざけられ、むちで打たれ、さらに鎖につながれ、牢に入れられるめに会い、また、石で打たれ、試みを受け、のこぎりで引かれ、剣で切り殺され、羊ややぎの皮を着て歩き回り、乏しくなり、悩まされ、苦しめられ、—この世は彼らにふさわしい所ではありませんでした— 荒野と山とほら穴と地の穴とをさまよいました。この人々はみな、その信仰によってあかしされましたが、約束されたものは得ませんでした。(11:35~39)

■はじめに

1. 手紙の背景と 11 章の内容

- (1) この手紙が書かれた時期は、紀元 64 年から 66 年頃。ユダヤ人の間でローマ帝国に対する反乱の機運が高まる中、愛国主義的な同胞たちから教会に対する迫害が激しさを増していた。一部のユダヤ人信者の中には、迫害を鎮静化するため、いったんエルサレムの神殿祭儀に戻ろうという動きが出始めた。この背教の動きに対して、著者は警告のためにこの手紙を書いた。
 - (2) 迫害の中で必要とされるのは、信仰による忍耐。この手紙の 11 章は、信仰による忍耐をテーマにしつつ、旧約聖書に記録された信仰の先輩たちの手本にならおうという内容である。
2. 11 章 32~34 節は、試練の中で信仰による勇気を発揮した先輩たちを挙げている。時期としては、士師の時代からイスラエル王国の時代である。
- (1) 「ギデオンとバラク」、「サムソンとエフタ」は、王国建国前、部族間のゆるやかな連合体であった時代にイスラエル民族を指導したリーダーたち（士師）である。
 - (2) 「サムエル」は、士師の時代から王国の時代に移行する過渡期を担った人物である。最後の士師である。また、少年ダビデに油を注いで、神がダビデを王に任命したことを示した預言者である。
 - (3) 「預言者たち」は原文では、「サムエルと預言者たち」とあり、サムエルの後に続いた王国時代以降の預言者たちを指している。
 - (4) 「ダビデ」は、王たちの代表として挙げられている。ダビデの人生は、まさに「信仰によって、国々を征服し、・・・」という 33 節と 34 節、そのものの歩みであった。33 節と 34 節の、信仰によって成された 9 つの項目のうち、ダビデに該当しないのは、「火の勢いを消し」だけである。

- (5) ダビデ以外の王で、「他国の陣営を陥れた」(34節)に該当する王としては、王国が北と南に分裂したあとの、南王国のヨシャパテである。

3. 前回までの流れと本日の内容

- (1) 北王国の歴史を概観し、預言者エリヤとエリシャから信仰の手本を学んだ。二人とも信仰によって「剣の刃をのがれ」た。また、35節「女たちは、死んだ者をよみがえらせていただきました」とあるのは、エリヤ(Ⅰ列17:17-24)とエリシャ(Ⅱ列4:18-37)による事例であった。また、37節「羊ややぎの皮を着て歩き回り」とあるのは、エリヤであった(Ⅱ列1:8)。
- (2) 前回から、南王国の歴史に入った。前回は、分裂後の4人の王を取り上げて、その中から、特に四番目のヨシャパテに焦点をあてた。
- (3) ヨシャパテ王は信仰によって「他国の陣営を陥れた」(ヘブル11:34)。
- (4) しかし、その前に、彼は、長男ヨラムの嫁として、北王国イスラエルのアハブ王の娘アタルヤを、迎え入れていた。その娘の母親、すなわちアハブの妻は、かのイゼベルである。娘アタルヤは、バアル崇拜とともに母親の気質もしっかりと受け継いでいたようである。長男ヨラムが王となって以降、南王国ユダは信仰の面では急速に下降していく。
- (5) 本日は、ヨラム以降の4人の王を取り上げる。分裂後では5番目から8番目の王となる、ヨラム、アハズヤ、ヨアシュ、アマツヤである。彼らに共通しているのは、主を捨て偶像崇拜に走ったことである。そして、最後は重病になったり、謀反で殺された。
- (6) この時代、ヨアシュ王の時の預言者のひとりが、37節で「石で打たれ」と言われている預言者ゼカリヤである。南王国の歴史は、背教が深まる時期に入っていく、迫害の中で信仰によって死を乗り越えた先輩たちを見ることになる。よって、本日から、ヘブル人への手紙の11章35-39節のテーマ「信仰は死を乗り越える」も視野に入れて、南王国の歴史を見ていく。

■南王国の5番目から8番目の王たち (BC848~767)

1. ヨラム (32歳、8年間) BC853~848 (32歳) ~846~841 Ⅱ列8:16~24

- (1) 16節「イスラエルの王アハブの子ヨラムの第5年(BC848)に、一ヨシャパテがユダの王であったが一ユダの王ヨシャパテの子ヨラムが王となった」
- ① 南王国ユダの王ヨシャパテの後継者指名は、2段階を経た。
- ② ヨシャパテの王としての期間は、35歳から25年間、60歳頃まで。ただし、彼の場合、治世の起算は父王アサが死んで単独王となってからである。よって、その治世は37歳、BC869から23年間、BC846まで。
- ③ 後継者指名の第一段階は、Ⅱ列1:17とⅡ列3:1とから判明する。ヨシャパテの治世第17年、53歳のとき。北王国イスラエルでは、アハブ王が戦死して、その子アハズヤが王となった年である。アハブ王が戦死した戦場には、ヨシャパテも同盟軍として参戦しており、危うかった。帰国して、早々に長男ヨラム27歳を後継者に指名して、共同王とした。
- Ⅱ列1:17「(北王国イスラエルの)アハズヤ王は、エリヤが告げた主のことばとお

りに死んだ。そしてヨラムが代わって王となった。それはユダの王ヨシャパテの子ヨラムの第2年であった。」とある。他方、Ⅱ列3:1には「ユダの王ヨシャパテの第18年に、アハブの子ヨラムがサマリヤでイスラエルの王となり」とある。北王国イスラエルでアハブの子ヨラムが王となったのは、BC852頃、その年は、南王国ユダでは、ヨシャパテ王の第18年=ヨシャパテの子ヨラムの第2年。よって、ヨラムは、父ヨシャパテ王の第17年に共同王となった。BC853、ヨシャパテ53歳である。

- ④ 後継者指名の第二段階が、Ⅱ列8:16である。治世第22年、BC848、ヨシャパテは58歳、現役の王であったが、自分が少しでも元気なうちに長男に王として采配を振るわせた方がよいと考えたのであろう。このとき長男ヨラムは32歳、国政を任せられた。
- ⑤ ヨシャパテ王は、25年間王であった。BC846年頃、60歳で死去。
- ⑥ ヨラム王は、32歳から40歳までの8年間、王であった。ヨラム王が死んだのはBC841年、父王が死んでからわずか5年後である。
- (2) 18節 彼の妻は、北イスラエルのアハブ王の娘であった。ヨシャパテが北イスラエルと友好関係を持つために、長男ヨラムの嫁にアハブ王の娘を迎えた。ヨラムは、「アハブの家の者がしたように、イスラエルの王たちの道に歩んだ」、これはバルヤアシェラといった豊穡神崇拝に走ったということである。
- 妻の名は、アタルヤ(Ⅱ列8:26)
- (3) 19節 「主は、そのしもべダビデに免じて、ユダを滅ぼすことを望まれなかった。主はダビデとその子孫にいつまでもともしびを与えようと、彼に約束されたからである」、主の約束は人間の側に問題があっても、破られることはない。
- (4) 21~22節 ヨラム王の時代に、エドムが反乱を起こし、ユダの支配から脱した。Ⅱ歴21:10、「これは彼がその父祖の神、主を捨て去ったからである」。
- (5) Ⅱ歴21:4によると、ヨラムは「父の王国に立つと勢力を増し加え」た。そしておそらく父ヨシャパテが死去したBC846の後、兄弟たち全員を殺した。彼自身はそれからわずか数年後、40歳で生涯を閉じた。その詳細は、Ⅱ歴21:12~19
- ① 預言者エリヤの書状(Ⅱ歴21:12~15) *エリヤ本人はBC852年頃に昇天
 - ② ペリシテ人とアラビヤ人による略奪(Ⅱ歴21:17) 財産も妻子も奪われる。男子で残ったのは、末子エホアハズひとり。
 - ③ 内臓の病気で大病をわずらい、2年間の闘病生活の末に死ぬ(Ⅱ歴21:18~19)
2. アハズヤ(22歳、1年間、その後6年間の空白) Ⅱ列8:25~29、Ⅱ列11:1~20
- (1) 北のヨラム王がラモテ・ギルアデを奪還するためにアラムの王と戦ったとき、アハズヤも北の同盟軍として参戦。この戦いでヨラムは負傷して、陣営をそのまま残して一時帰国、イズレエルにて静養中。このとき、エリシャから遣わされた預言者が陣中の将校エフーに油を注いだ。これを発端として、将校エフーによる謀反が起きて、北のヨラム王は母イゼベルと共に殺された。
- (2) 南のアハズヤ王はヨラム王に同行してイズレエルに来ていた。この謀反に巻き込まれ、戦車に乗って逃げたが、追われる途中で負傷し、メギドまで来て車上で息絶えた。

- (3) アハズヤの母アタルヤは、北王国の実家が謀反で没落し、自分の母イゼベルも兄弟のヨラム王も死んだこと、自分の子であり南の王であったアハズヤも死んだと知ると、ただちにわが子アハズヤの一族を皆殺しにした。
- (4) ただし、このときアハズヤの姉妹のエホシェバが、殺されるアハズヤ王の子たちの中から生後間もないヨアシユを盗みだし、彼とそのうばとを寝具をしまう小部屋に入れて隠した。その後、ヨアシユとうばは、主の宮の中に6年間、身を隠した。
- (5) アタルヤは、自ら王と称した。
- (6) 7年目に、祭司エホヤダと近衛兵の百人隊長たちが立ち上がり、アタルヤを廃して、ヨアシユを王とした。エホヤダは【主】と【王と民】との間で、主の民となるという契約を結んだ。民はバアルの宮を取りこわし、その祭壇とその像を打ち砕いた。
3. ヨアシユ (7歳、40年間) BC835~796 II列 11 : 21~12 : 21
- (1) ヨアシユは、祭司エホヤダが彼を教えた間はずっと、主の目にかなうことを行なった。ただし、高き所は取り除かなかった。
- (2) II歴 24 : 15~22 祭司エホヤダの死後、ユダのつかさたちが王に偶像崇拜を認めるよう要求、王はそれを聞き入れた。彼らは、その父祖の神、主の宮を捨て、アシェラと偶像に仕えた。主は、彼らを主に立戻らせようと預言者たちを遣わしたが、彼らは耳を貸さなかった。神の霊が祭司エホヤダの子ゼカリヤをおおったので、彼は民に預言した。彼らはゼカリヤに対して陰謀を企て、主の宮の庭で、王の命令により、彼を石で打ち殺した。ヨアシユ王は、ゼカリヤの父エホヤダが自分に尽くしてくれたまことを心に留めず、かえってその子を殺した。ゼカリヤは「主がご覧になり、言い開きを求められるように」と言った。
- (3) アラムの王ハザエルがエルサレムを攻撃しようとしたときに、ヨアシユは、前の3代の王たち、すなわちヨシャパテ、ヨラム、アハズヤが聖別して捧げたものであった、主の宮と王宮との宝物倉にあった金をすべて、アラムの王に差し出して、攻撃を免れた。II歴 24 : 23~25 によると、
- ① この事件が起きたのは、ゼカリヤが殺された年の翌年
 - ② アラムの軍勢は、エルサレムに来て、民の中のつかさたちを一人残らず殺した。
 - ③ 分捕り物はすべて、ダマスコにいるアラムの王に送った。
 - ④ アラムの軍勢は少人数で来たが、主がユダの非常に大きな軍勢を彼らの手に渡された。
 - ⑤ 人々はヨアシユを裁判にかけた。そのときヨアシユは重病の状態にあった。
- (4) ヨアシユは、家来の謀反によって殺された。
- ① II歴 24 : 25 によると、家来たちは、ゼカリヤたち預言者の血に報復するための謀反であった。彼らは病床でヨアシユ王を殺した。
4. アマツヤ (25歳、29年間) BC796~767 II列 14 : 1~21
- (1) 彼は主の目にかなうことを行なったが、彼の父祖ダビデのようではなく、すべて父ヨアシユが行ったとおりに行なった。父と同様、高き所は取り除かなかった。民はなおも、その高き所でいけにえをささげたり、香をたいたりしていた。
- (2) 王国が彼の手によって強くなると、彼は自分の父、王を打った家来たちを殺した。
- (3) 塩の谷でエドムと戦い、大勝した。これに自信を得て、北のイスラエルに戦いを挑

んだ。イスラエルの王は使者を送ってきて戦いをやめるよう説得するが、アマツヤは聞き入れなかった。ベテ・シエメシュでの戦いでユダは敗れ、アマツヤは捕虜となった。イスラエルの王はエルサレムに来てその城壁の一部を壊し、主の宮と王宮の宝物殿にあったすべての金銀と器具を戦利品とし、人質を取って、アマツヤを王位に戻した。

- (4) エルサレムの人々が、王に対して謀反を起こし、アマツヤは逃亡。ラキシユに逃げたが、人々はそこまで追いかけて、アマツヤを殺した。
- (5) 21節「ユダの民はみな、当時16歳であったアザルヤを立てて、その父アマツヤの代わりに王とした」というのは、紀元前792年頃。父アマツヤ29歳が北のイスラエルとの戦いに敗れて捕虜となったときであると推定される。
- (6) 22節「アザルヤは、アマツヤが先祖たちとともに眠って後、エラテを再建し、それをユダに復帰させた」というのは、アマツヤ54歳が謀反で殺されて、アザルヤが代理王の立場から単独の王となってから、エラテを再建した、という記事である。

■本日のまとめ

1. 5番目のヨラム王

- (1) 27歳で共同王となってから、32歳で父王ヨシャパテから国政を任されるまでの間、大きな出来事が次々と起きた。
 - ① 父ヨシャパテが北王国と縁を結んだために、モアブ・アモン・エドムが連合してその大軍が攻めて来るといふ国難を迎えた。このとき、父ヨシャパテと南王国のつかさたちは主により頼み、主によって救われた(Ⅱ歴20:1~30)
 - ② 父ヨシャパテが北のアハズヤ王と共同で商船隊を造ったが、それは主によって難破させられた(Ⅱ歴20:35~37、Ⅰ列22:48~49)
 - ③ 父ヨシャパテが、北のヨラム王のために、対モアブ戦にて同盟軍として参戦した。このとき荒野で飲料水を失って、自滅の危機があったが、預言者エリシャを通して、再び主に助けられた(Ⅱ列3:6~27)
- (2) 南の5番目のヨラム王自身は、いわば見習いの王としてヨシャパテ王の経験をそば近くで見聞きしていた。しかし、それが自分の信仰には結びつかなかった。罪の性質は確実に遺伝するが、信仰は遺伝しない。本人が主を求めるかどうか、である。
- (3) 父王ヨシャパテは、後継者育成を心掛け、兄弟間の争いを防ごうと、人として最善を尽くした(Ⅱ歴21:2~3)。しかし、それも空しく、長男ヨラムは自分の権力が固まると、兄弟たちを一人残らず剣にかけて殺し、またイスラエルのつかさたちのうち幾人かを殺した。(Ⅱ歴21:4)。
- (4) ヨラム王の妻は、北のアハブ王とイゼベルの娘アタルヤであった(Ⅱ歴21:6)。父王ヨシャパテがよかれと考えた縁結びである。しかし、ヨラムの恐ろしい行動の背後には、アタルヤ、そしてメシアの家系を潰そうとするサタン動きが見える。

2. 6番目のアハズヤ王

- (1) 父ヨラムの子の中で、彼ひとりだけが略奪隊の手から守られた。
- (2) 父ヨラムの悲惨な最期を見ながら、主の前にへりくだることなく、王となったその年、北イスラエルの同盟軍として参戦。母アタルヤの実家を助けるわけであり、アタルヤの影響力があつたのであろう。北イスラエルの謀反に巻き込まれて、死亡。

- (3) 自分の子どもたちは全員が母アタルヤに殺されることになる。ただ一人、ヨアシュのみが祭司エホヤダによって保護され、神殿の中に隠された。
3. 7番目のヨアシュ王
- (1) 祭司エホヤダの薫陶を受けていた間は、主を求めた。
- (2) 祭司エホヤダが死んで、民のつかさたちが偶像崇拜を容認するように王に求めたとき、ヨアシュ王はそれに応じてしまった。
- (3) 主は彼らを立ち返らせようと預言者たちを繰り返し遣わしたが、彼らは耳を傾けなかった。
- (4) 祭司エホヤダの子ゼカリヤが立って、預言したところ、民は陰謀をもって王の命令を引き出し、ゼカリヤを神殿で石打ちにして殺した。
4. 8番目のアマツヤ王
- (1) 「主の目にかなうことを行った」とあるが、信仰はない。
- (2) 一度エドムと戦って勝つと、高慢になって、無用な戦いを北イスラエルに仕掛けた。戦いに負けて、捕虜となる。29歳のときである。北イスラエルは賠償金を課すことにとどめ、王位は戻した。
- (3) このように主の守りを受けながら、アマツヤは信仰を持つことなく、晩年を迎え、家来の謀反で死んだ。54歳頃。
5. 預言者ゼカリヤの信仰
- (1) 「神はこう仰せられる。『あなたがたは、なぜ、主の命令を犯して、繁栄を取り逃がすのか。』 あなたがたが主を捨てたので、主もあなたがたを捨てられた。」(II 歴 24:20)
- ① 主の命令を守るかどうか、これは霊的な救いとは関係しない。救いは、恵みにより、信仰を通して、与えられる。人の行いではない。
- ② 主の命令を守ることで、イスラエルの民は、約束の地での繁栄を受けることができる。そうでなければ、約束の地から吐き出される。これは、モーセを通して当時のイスラエル民族に与えられた原則である。
- (2) ゼカリヤは死ぬとき、「主がご覧になり、言い開きを求められるように」と言った。
- ① 迫害を耐える力と勇気は、主がご覧になっているという神への信頼である。
- ② そして、神は正しくさばいてくださると確信し、神にゆだねることである。
6. 私たち新約の聖徒たちは、「キリストの律法」のもとにある。内側に新しい性質「霊」をいただき、助け主聖霊によって導かれるから、できることである。
- (1) I ペテロ 3:9 「悪をもって悪に報いず、侮辱をもって侮辱に報いず、かえって祝福を与えなさい。あなたがたは祝福を受け継ぐために召されたのだからです。」
- (2) I ペテ 4:12~13 「愛される者たち。あなたがたを試みるためにあなたがたの間に燃えさかる火の試練を、何か思いがけないことが起こったかのように驚き怪しむことなく、むしろ、キリストの苦しみにあずかれるのですから、喜んでいなさい。それは、キリストの栄光が現れるときにも、喜びおどる者となるためです。」